

17世紀イングランド常備軍論争2 (翻訳)

藤原 浩一

LETTER,

BALLANCING THE

NECESSITY

OF KEEPING

A Land-Force

In Times of

PEACE:

WITH

The **DANGERS** that
may follow on it.

Printed in the Year 1697.

平和時に陸上戦力を維持する必要性について、平和時に起こるかも知れない危険と比較検討する手紙¹ 1697年印刷。

みなさん、我々はずいぶん名誉ある講和を勝ち得ました²。我が国民全員が長い間待ち望んでいたものですが、大多数の人々があきらめかけていた講和です。イングランドは現在世界の驚異のまです。わが国民自身の敵愾心と警戒心以外、何ものも我が国を傷つけることはできません。もし我々が平和を最大限の分別と判断力で維持すれば、戦争遂行において精神力と勇気を発揮したように、我々は我が国の近隣諸国すべてを意に従わせることができるでしょう。そして我々が勝ち得た平穏をヨーロッパの他の地域にももたらすことができるでしょう。

これを実行するための手段が今あらゆるところで話題となっています。次の一点では全員の意見が一致しています。すなわち、我が帝国の海上での夏と冬の強力な守りとして強大な艦隊を維持すべきであり、我が国の弾薬庫には十分な弾薬を備蓄しておかなければなりません。そして我が巨大な艦船については、短期間のうちにイングランド艦隊を繰り出すことが出来るような態勢が必要です。このことは必要この上ないことであり、これ以上長々と述べることは無用でしょう。この件に関して我々の意見が異なると思われる一点は、侵略に対して対抗できるだけの陸上戦力を維持すべきなのか、もしくは、外国における我が艦隊と同様に、国内において十分信頼に足るほど市民軍を増強すれば、それだけで我が国の安全が守れるのだ、という主張です。

私は我が国を奇襲し、もしくは講和条約を破り、条約の名誉と信義に背いて我が国を侵略しようと機会をうかがっている近隣諸国があるなどと不穏当な考えを述べるつもりはありません。また、そのような疑念も持っていません。しかし平和の最善の保証は平和を維持するための十分な戦力です。そしてあらゆる近隣諸国に講和条約を厳格に守らせるための最も確実な方法は防備を固めることです。近隣諸国が我が国を奇襲する機会を見いだせず、平和時に我が国民が惰眠を貪ることもなく、戦争の方法を忘れてしまうことがなければ、近隣諸国は条約を忠実に守るでしょう。つまり、近隣諸国の君主の信義が絶対的に安全を保証するわけではなく、条約に違反しても大して得るものがないことを彼らに理解させ、条約を守らせるようにしなければならない、と私が結論づけるとき、近隣諸国のいかなる特定の君主をも非難しているわけではありません。

しかし誤解しないいただきたい。

私が皆さんに陸上戦力の必要性を考慮して下さるように望んでいると思えても、それは

常備軍とはかけ離れたものです。国王に対して国家の警戒心を感じる人、先の治世³のように衛兵や軍隊によって周囲を守られていなければ安全ではないと主張するような人は、自由と祖国を愛するすべての真のイングランド人によって嫌悪されるべき人です。現在の我が国と近隣諸国のおかれた状況を考慮してもしなくても、毎年強大な戦力を維持しておくことは我が国にとって賢明でも、必要でもないでしょう。国内外の状況は毎年議会で検討され、そのような戦力は十分な根拠によって増強されたり削減されたり、もしくは完全に解散されてしまうこともあります。私は、我々が国王陛下を信頼している理由について強く主張するような不公平な議論をあなた方とするつもりはありません。というのは国王の気質や、彼の境遇、彼の利害、そして彼の過去の生活について、オランダとの関連や、当地イングランドに関連して、どれだけでもっともらしく、いかに多くの発言がなされたでしょうか。それでも私はその件は重視しません。というのは、ある人物が答えようとしているときにその人を苦しめるような議論を押しつけることは正しいことではないからです。人間は所詮人間にすぎないので、国王に強大な権力を与えてしまえば、彼らの高潔さに関して危険な実験をすることになるという議論が生じることは分かっています。また、権力に見合い、忠実に十分考慮して行使する国王に対して与えられた権力を、別の、それほどまでには信頼もおけず、優秀でもなく、能力もない国王にも与えるべきだという主張がなされるでしょう。

一言で言えば、もし我々が一昔前、我が国と近隣諸国がそうであったような状況であれば、強い憎悪感を持ってこの提案を拒絶するでしょう。しかし事態は変化しました。全世界、とりわけ近隣諸国は、強大な戦力を維持することに関して誤った考えを持ってしまいました。また、あいにく最大の戦力を我が隣国が持つに至り、今後強大な軍隊を維持するでしょう。そして我が国がこのような危険で無防備な状況であれば、我が国はあまりにも誘惑的な標的となり、攻撃の試みは成功する可能性があるばかりでなく、確実なものとなるでしょう。イングランドは開放的な国であり、豊かで、どこでも軍隊を維持することができます。我が国の町や都市はすべて無防備で、河川はすべて徒渉できます。万一敵が上陸すれば我が国には敵の進軍を阻止するための隘路や堅固な場所もありません。したがって我が国全体が、侵入した敵に対して無防備な状態です。これに対しあなた方は、我が国に気づかれずに、軍隊やそれを輸送する艦隊を結集することが可能でしょうか、と反論されるかも知れません。軍隊や艦隊の結集には時間もかかり、そのような準備を我が国が気づかないほど情報に事欠くとは想像できません。そのような場合には我が艦隊が自国を防衛するでしょうし、その間に我が国の市民軍が召集され、危険が予想される地域に派遣さ

れるでしょう。これはいかにももっともらしい意見です。そして疑いなく、必要な注意もはらわずに事態を考慮する人々にとっては効果的な主張でしょう。しかし我が国が最近、一度はハーグから、さらにカレーから、二度にわたり奇襲攻撃を受けそうになったことをお忘れではないでしょうか。我が国自身が義務を果たしていない場合に、神がいつも我が国民のために奇跡を起こしてくださるなどと期待してはいけません。戦時や警戒すべき時期であれば我が国は警告も情報もなく、致命的な侵略を受ける可能性が極めて高く、我が国が何の恐怖も警戒心も抱かず、怠惰で安穩としているときに、そのような陰謀が計画される可能性がずっと高いのです。そしてこの陰謀は我が国がそれに気づいたときにはすでに遅すぎて、阻止や抵抗もできない、というようにうまく処理されるでしょう。そして急襲を防ぐことも、我が国を侵略した軍隊に抵抗もできないような状況であれば、我が国の情報収集力に何の意味があるのでしょうか。すべてが君主の意志に依存して、国民が崩壊した絶対主義政府は、国民から期待されたことを実行もせず、自分たちに課せられた信頼を守ることもせず、自由政府のもとで幸福を享受している国民にとっては考えられないような方法を考えだし、実行することがあります。現場にいる軍隊は、意図が判断できないような進軍や迎撃の命令を受けたりして、敵を効果的に阻止することは出来ないでしょう。両国間に海峡の存在する国家では逆風がこのような事態の出現を遅らせることもあるでしょう。多くの様々な場所の、様々な人々にそれぞれの命令が下され、大会戦の戦場に集結するまでお互いには何もわからないでしょう。

確かに、我が国は海外にすぐれた艦隊を持っていることを認めなければなりません。しかし、国家の安全などというような重要な問題を運任せにはできませんし、偶発的な災難が起ころうなとき、単一の防衛手段に頼るべきではないでしょう。我が国を侵略するための艦隊や軍隊を運ぶ風向きが、我が国の艦船を港に釘付けにすることになります。したがって、艦隊が哨戒し、出撃できる好ましい機会があったとしても、大損害を受けてしまい、我が国の海や港を防衛することはできないでしょう。これは十分に予想される事態です。というのは国王がイングランドに最初に上陸されたときに現実起こったことだからです⁴。先の国王⁵は強大な艦隊を維持しておられました。この艦隊が、もしオランダ軍と交戦できていれば、とくに彼らが護衛していた輸送船団のことを考慮すると、オランダ軍には強大過ぎたでしょう。しかし我が国王を運んできた東風が、オランダ艦隊が通過するまでイングランドの艦隊を河にとどめていました。そして出航したときには嵐によりイングランド艦隊はとどめられ、閉じ込められ、なんの作戦行動もとれず、係船されたままでした。万一そのような事態が発生した場合、誰が国家を危険にさらしたいと思うでしょう

か。

しかし最後の予備兵力として我が国の市民軍があります。大部隊の結集が可能でしょう。兵士は勇敢で、規律があり、当然のことながら自国を愛しています。市民軍の士官は資産持ちであり、自分たちに十分な利害関係のある国家の重要な事柄を十分に任せられる人々です。

私は市民軍を軽蔑したり名誉を傷つけたりするような不快な論争に加わるつもりはありません。彼らは疑いなく世界で一流です。そしてもし市民軍を対処させるというのであれば、その決定にはほとんど何の疑問も持ちません。しかし、我々は、これまでに軍隊を見てきたので、長期間の訓練を受け、専門技術を学び、戦争のきびしい試練を体験している軍隊と、未熟で十分な訓練も受けていない集団の最優秀部隊との違いがわからないはずはありません。現在の戦争の全体的方式では訓練された軍隊は、ずっと多数の、まだ経験もあまりない兵に対しては、非常に対抗しがたい敵対者であることが明らかとなり、自分たちにとっては強大すぎるのが分かります。我が国の市民軍は現在想定されているものよりも軍事能力を高めるように訓練され、工夫されるように迫るべきだということは理解しています。これは時間のかかる仕事であり、非常に多くの事柄に関わる事業であり、実行するには多くのミスも起こりうるものなので、国家の安全と維持がそのような不確実なものに依存しなければならないとすれば、国家は危険にさらされているといわざるを得ません。我が国には長い訓練期間を経た軍隊があり、苦しい経験をしてその不幸な職業を学び、今では世間でも認められ、それによって必要となっています。我が国は軍隊により存続できるか、もしくは軍隊により滅亡するか、どちらかです。多くの勇敢な紳士が勉学や、他の生計の手段を途中で投げ出しました。もし、我々が戦争において評判を高めたあと、平和時に、あるまじき怠慢に陥り、おそらく決して起こらないであろう、遠く離れて、不確かな危険への恐れに抵抗できずに身を乗り出せば、ただちに我々が確実に招いてしまうような危険に身をさらすことになります。それは彼らに辛苦を強いるばかりでなく、裸で無防備のまま我々の身を投げ出すことです。真実を述べれば、数年前、我々には警戒すべき正当な理由があったばかりでなく、确实この上ない証拠があった先の御代において、自分たちの行為がどうであったかを思い出しもせず、特権に対してひどく警戒心を抱き、公の自由のために狂信的なほどのすばらしい愛国者に突然変わるとは思えません。当時、意図は率直で、試みは大胆でした。それでも当時沈黙を守った人もあり、また現在自由を求めて熱狂しているほどの熱心さで独裁に対して心底熱中して加わったものもありました。戦時に彼らがとった方法は偽装が非常にまずく、我が国を侵入と征服に対して無

防備にさせようとひどく骨折ったように思える人々が自由と法について語る時、彼らが本気だなどと信じる人はほとんどいませんでした。戦時に彼らが達成出来なかったことを今、我々を安らかに眠らせたまま彼らは実現しようと望んでいます。というのは、もし我々が現実の安全保障を放棄し、想像上の安全保障に身を委ねれば、我々は実験に計り知れない代価を支払うことになるでしょう。そしてはや取り返しがつかなくなって初めて我々自身の過ちを確信することになるのです。

しかし、ローマやスパルタの例をひいて我が国の市民軍に強く賛同する根拠とする人々がいることは分かっています。両時代のすべてが一致しない限りある特定の時代の先例を別の時代に当てはめるような議論はまちがった方法です。どのような国家においても近隣諸国より強大でないとしても、互角であればすべてが安全です。スパルタとローマは少なくとも近隣諸国と互角でした。彼らは現実には近隣諸国よりもはるかに強大でした。スパルタでは若者を戦争のためにだけに訓練しました。もしくは戦争に適するように他の訓練をし、短く、明白な話し方をおぼえさせたのです。彼らの間では芸術や学問はありませんでした。その結果、彼らの共和国全体が常備軍のようなものとなり、他のギリシア諸国を恐怖に陥れたのです。ローマは自由な時代においては、彼らからはほんの少しばかり日立っていました。彼らには確かに農業の余地があり、スパルタ人が奴隷に従事させていた農業に自らの手を染めていました。しかし彼らは全員戦争の訓練を受けていました。そして彼らの間の誰しも多くの戦闘を数え上げ、それらの戦闘で受けた傷を見せることが出来なければ職に就くことは要求できなかったのです。だからローマは軍事共和国でした。ローマは近隣諸国と互角であるばかりでなく、より強大だったので、まさにこの一事により、近隣諸国を征服しても何の不思議もありません。国外における事情と同様にイングランド国内において国体全体を変え、贅沢ばかりでなく富と交易を追放しない限り、我々の時代とこれらの先例は決して合致することはありません。スウェーデンの市民軍の話はそれほど励みになるものではありません。スウェーデンで市民軍を新しく編成替えしたとしても自国の自由を守るためにめざましい意義はほとんどありませんでした。

次のような質問をされる方もあるでしょう。どのようにして我々の祖先は我が国を防衛したばかりでなく、すべての近隣諸国、とくに現在我が国にとって最も危険と思われる国の人々に対して恐怖を与えたのか。これは非常に多くの民衆が雄弁に語る題目でしょうし、自国民の武勇を誇る人々や、いくつかの会戦の名前や、軍隊の人数だけの歴史しか読んだことのないような人々が口を出すようなものかも知れません。しかしこの件に関して我々は皆、当時同様な考えでした。すべての国家が同様に戦争について無知であり、和平の術

策のみに没頭していました。当時勃発した短期間の戦争では、疑いなく、より勇敢な国がいつも勝利を納めていました。しかし歴史の初期段階から今日に至るまで明らかなことですが、正規軍は常に市民軍にとっては強大すぎました。スパルタ、アテネ、そしてテーベ⁶などは順番に自国の軍隊がより訓練されて、戦争の経験をより多く積み、相手に勝ちました。最後に、あらゆる国に軽蔑されていたマケドニアの王がそれら諸国をすべて従属させたのです。キュロス⁷はペルシャ人を訓練してバビロニアを征服しました。そしてアレキサンダーはおびただしい数の軍隊、もしくは大勢の市民軍が彼に敵対しましたが、父親が訓練した軍隊でペルシャ帝国を容易、かつすみやかに征服しました。ローマ軍が市民軍に過ぎなかったとき、市民軍の中では最高の戦力を持っていましたが、自国より弱小の近隣諸国に対して大いに優勢に戦ったのです。しかしハンニバルが訓練された軍隊を率いてきたとき、ローマ軍はあらゆる戦闘で敗れていたのですが、長期間にわたる戦争で戦術を覚え、最後には彼らをイタリアから追い払ったばかりでなく、カルタゴを従属させました。規律の守られている限りローマの軍隊は無敵でしたが、すべての戦争体制が終わり、ローマ軍が市民軍となったとき、北ヨーロッパ諸国は東のサラセン人と同様に、ローマ帝国を蹂躪しました。サラセン人がその規律をゆるめると、トルコがローマを彼らから奪い去ったのです。そしてもし彼らがティマリオット⁸に依存して、イエニチェリー⁹やスイパーヒー¹⁰の方により頼ることがなかったら、彼らはこれほどまで長期間キリスト教国にとって脅威とはならなかったでしょう。したがって、すべての国家の歴史から疑いの余地はないのですが、訓練された正規軍は世界中の最高、最強の市民軍よりはるかに強大です。これらすべてに付け加えて、エリザベス女王の時代に我が国はどのように行動したでしょうか。我が国の市民軍は当時唯一の武力部隊でした。我々は市民軍に頼り、市民軍によって防衛されました。しかし我が国の歴史のこの部分のいくつかの詳細について皆さんの頭に入れておいて頂きたいことがあります。我が国は当時差し迫った危険にさらされており、当時の最も賢明な人々により絶望的であるとされていました。暴風雨や、彼らの船舶の不釣り合いな大きさや、命令の硬直性、そしてパルマ公¹¹に対する嫌悪感など、それらすべてが相互に作用して、当時のイングランドを救うことになりました。我が国の市民軍や艦隊が原因ではないのです。その時はあまりにも多くのことが極めて異常に同時に起こり、それが我が国を救ったのです。しかし、当時と同様に我が国を無防備のままにしておくことはあまりにも神の摂理に依存することになります。なぜなら当時我が国は非常に不思議に思えるほどの幸運に恵まれて救われたからです。しかし一言述べておかなければなりません、現在の我が国の危険はずっと大きいものです。当時スペインが強大な無敵艦隊を

保有し、巨大な富、そしてよく訓練された軍隊をかかえていたことは事実です。しかし彼らの軍隊が我が国の近く、フランダース¹²に駐屯していても、彼らの枢密院の場所や、彼らの艦隊、そして富は我が国から遠く離れていました。それでもなお当時の最も賢明な人々は、我が国は滅亡してしまうと考えていました。現在の危険はより近く、より甚大です。強大な戦力を持ち、しっかりと団結し、実戦経験もあり、強力な海軍が我々の眼前にせまっています。我が国はエリザベス女王の時代に大きな危険を冒しましたが、奇跡的に救われました。それゆえに今は、より困難な苦境に直面し、我が国のすぐ玄関先により強大な隣人がいるときに、自国の心配もせず、我が国の存続の唯一可能な手段を取らないでおくなどという意見は議論に値しません。我が国はすばらしい二度の幸運を経験しました。しかし我々はどのような方法や手段を用いて我が国を救うべきかをも考えず、三度目の幸運を期待することは厚かましすぎるでしょう。この件に関してはこれ以上語りません。しかしピア¹³の言葉をひとつ述べておきましょう。それは彼の家系では今も語り継がれていることです。女王が有名な彼ら二人の将軍に軍隊を指揮するようにと彼らをオランダから呼び戻すために使いを出されました。軍隊は熱気と勇気に満ちあふれていました。女王は騎乗して閲兵され、兵士を鼓舞されました。そしてあらゆる場所で雄叫びと喝采で歓迎されました。女王が兄弟の一人に軍隊をどう思うか、と尋ねられました。彼は「勇敢な軍隊です」と答えました。しかし、女王はその態度に自信のなさを感じられ、説明を求められました。彼は答えて言いました。自分は世間で臆病者と呼ばれたことはありませんが、ここでは唯一人の臆病者でした。全員がスペイン人の上陸を望み、その事態に際し、どのような手柄をたてるつもりか語りあっていましたが、その場で恐れ、おののいていたのは自分一人でした。

平和時に陸上戦力を維持する必要性についての意見に対する最後で最強の反対は、この軍隊は我々国民を支配するようになるというものです。国内における影響力が強大となり、議会で勢力を維持し¹⁴、もしくはそうできないとしても、議員を国会から追放し、短期間のうちに自らの存続方法を見だし、自由と財産を荒廃させ、我が国民を支配するでしょう。これは広範囲な分野にわたり、歴史はこの事例であふれています。この題目について詳細に明らかにすることは容易です。ローマ時代の近衛兵¹⁵から我が国の現代の軍隊まで常備軍の非常に恐ろしい例を十分に集めることができるでしょう。誰にそれが疑えるでしょうか。しかしこの題目がもたらすあらゆる説得術はこの場合には誤って適用されています。一年に一度議会はこの件に関して審議しなければならないと定められています。彼らは国内外における状況の変化や、軍隊が警戒心を抱かせるような管理をされていない

かどうかを理解するでしょう。そして判断はあなた方にお任せしますが、それほどまでの短期間に自国を侵略し、我が国の国体を破壊する態勢を整えるまでに軍隊を仕上げ、影響力を発揮することが可能でしょうか。シーザーがその全才能を発揮しても、十年間の指揮とその成果の後にやっと自分の軍隊を機能させましたが、それを一年間で実現しようとする試みは他の人々にとって大した励みにはなりません。あなた方はおそらく軍隊による目に見える暴力よりも、密かな影響力の方により多くの恐れを抱いておられるのでしょうか。要するに、あなた方は議会の腐敗を恐れておられるのでしょうか。正直に申しまして、これに答えることは困難です。警戒心は頑固で直すことが出来ない憂鬱です。病気にまでなれば多くの妄想的な恐怖を招きます。そのような不機嫌な気持ちに襲われる人々は自分たちが恐れているものの実態も理由もわかっていません。おそらく様々な出来事がつねに彼らに生じるのでしょう。そして果てしなくそのことを考えていると健康を害することになり、気難しくなり、おそらくは決して起こらないことをいつも夢想している間に、現実の心配事をすべて疎かにしてしまうことになるでしょう。我々は現在の危険について考慮しなければなりません。そしてはるかかなたの将来起こるかどうかかも知れないことにうつつを抜かさずに、現在の危険から身を守る最も適切な方法について考慮すべきです。我々の代表は彼らが考えつく最も効果的な方法で我が国の国体を守るために努力しています。しかし結局のところ、我々はイングランドを議会の手に委ねなくてはなりません。議会は我々自身です。この国が自由に厭きてしまい、美德も、分別も、その国体を守る力もないような致命的な時が来れば、すべてを投げ出してしまうでしょう。あらゆる法律を駆使し、思いつくあらゆる防壁をその行く手に置いて阻みなさい。不老不死が不可能であると同様に、政府を不滅にすることも不可能です。私は常備軍からいくつかの不都合が生じる恐れがあることは否定しません。それゆえに常備軍が我が国の保全に必要な不可欠であると信じていなければ、あなた方を説得しようなどという努力はしません。なぜなら、現在我々を危険から守るべきもの自体が、将来のあるとき、我が国の自由に悪影響を与えることがあるかも知れないという理由で、我が国を現在の確実な破滅の危険にさらしたまま放置するつもりはありません。そのようなことはイングランドが自国に忠実である限り、あり得ないことです。また、国家が自由の気高い意識をなくしてしまったときは常に、誰も今はそうなるとは気づいていないとしても、長く守られてきた国が、すぐにでも自らを束縛してしまうでしょう。

結論として、この平和時における陸上戦力の維持については、その本質が極めて繊細で、なおかつ非常に重要なので、偽りの飾りたてた言葉や口当たりの良い言い回しを用い

ず、厳しく吟味されなければなりません。私が我が国の自由が失われないようにひどく気を配っていることはおわかりでしょう。いつもそのために誠実に、ひどい冒険もし、それに命をかけているほどなのですから、あなた方は私の発言を疑うことはできないはずです。この主張に関しては、私が我が国の将来の国体と、自由の維持と同様に、我が国の現在の安全以外は、いかなる考えも持たず、また持ち得ないことはおわかりいただけると思います。

あとがき

イングランド王となったウィリアム三世はヨーロッパ大陸でのフランスの覇権を阻止する目的で大同盟戦争に参加していたが、共同統治者であったメアリ二世亡き後（1694年死亡）、イングランドの単独君主となり、その後1697年、その戦争がレイスウェイク条約により終結する。当時のヨーロッパ大陸の情勢から、その後も軍隊を維持する必要に迫られていたウィリアム三世がその経費をイングランド議会に要請した。この平和時における軍隊の経費負担に端を発した論争が常備軍論争として広く知られている。イングランドにおける常備軍論争自体はこれが初めてではなかったが、このときほど議論が沸騰し、熱心に論じられたことはなかったと言われている。

イングランドにおける最初の常備軍と言われるものは王政復古時（1660年）のチャールズ二世の軍隊だとされている。当時チャールズ二世は亡命先のヨーロッパ大陸より軍隊を伴って帰国した。亡命中はチャールズ二世自身がこの軍隊の経費を負担しており、兵士への給与が遅滞気味であった。この軍隊の維持費用をイングランド議会に要求したのである。それ以後、イングランドではこの常備軍の経費に関して、またその利害得失に関して常に議論されている。

1697年から1700年にかけての常備軍論争は共和主義者トレンチャードとモイルの2名による匿名のパンフレットが活発な論争を引き起こしたとされている。彼らの主張では、イングランド防衛は市民軍で事足りるとし、常備軍の維持は費用がかかりすぎるばかりでなく、古代ギリシヤ、ローマの時代の例からも明らかなように、軍隊は議会を支配し、専制的に国家、国民を支配するようになる、など、イングランド国民にとって弊害が大きすぎるという観点からこれら共和主義者は常備軍に反対したのである。

それに対して、国王側に立ち反論を加えた主要な人物がダニエル・デフォーであり、このジョン・ソマーズである。しかし双方とも軍備が全く不要とは主張していない。共和主義者側の主張は、共和国を目指す際に常備軍は障害となり、また自国の自由も保障されな

い。常備軍は独裁国家となる危険性が高いという主張である。

すなわち、常備軍は弊害が多く、市民軍で祖国防衛が十分可能であるという共和主義者側の主張に対して、費用はかさむとしても十分訓練された常備軍でなければ強大な目前の敵に対抗できないという政府（国王）側の主張である。共和主義者側のパンフレットでは理念が先走り気味で、具体的事実は混同が多いとデフォーが指摘している。このソマーズのパンフレットは表現も穏和な感じを受ける。ソマーズはこの当時、文字通り政府で主要な地位を占めており、政府の代表的な主張を発表したパンフレットである。当時のヨーロッパ大陸の情勢を考えれば政権側の意見としては妥当、かつ当然な見解といえよう。

注

- 1 本パンフレットはジョン・ソマーズ (John Somers, 1651-1716) によって書かれた。共和主義者ジョン・トレンチャード (John Trenchard) とウォルター・モイル (Walter Moyle) による *An Argument, Shewing, that a Standing Army Is inconsistent with A Free Government, and absolutely destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London: 1697 (October) に対する政府側にたつ反論であり、同様な趣旨でダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660?-1731) も反論のパンフレット *Some Reflections On a Pamphlet lately Publish'd, Entitled, An Argument Shewing that A Standing Army Is inconsistent with A Free Government, And Absolutely Destructive to the Constitution of the English Monarchy*, London: 1697 を出している。
- 2 大同盟戦争 (War of the Grand Alliance, 1688-1697) の終結。1697年9月20日オランダのレイスウェイクでレイスウェイク条約 (またはリズウィック条約 Treaty of Ryswick) が締結された。神聖ローマ皇帝も指定された期限ぎりぎりの10月30日、調印に応じたことにより、この戦争は終結した。(フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』、および「歴史文書邦訳プロジェクト」による『レイスウェイク条約』(大同盟戦争の講和条約, 1697))
- 3 ジェームズ二世 (James II) の治世 (1685-88) 自分の娘であるメアリ二世 (1662-1694) とその夫である、後のウィリアム三世とがイングランドへ上陸した後、1688年末、自ら大陸へ亡命した。これ以後ウィリアム三世とメアリ二世のイングランド共同統治が始まる。フランスに逃れたジェームズ二世は捲土重来を図って1689年3月、フランス王ルイ十四世の援助を得て、フランス軍を伴ってイングランド南部を迂回してアイルランドに上陸した。アイルランド議会はウェストミンスター決定に従わず、ジェームズ二世が王であることを確認し、「信仰の自由に関する法」を成立させた。かくしてジェームズ二世=カトリック勢力とウィリアム三世=プロテスタント勢力の戦いが始まったが、ボイン川で敗れ

たジェームズ二世は敗残の味方を置き去りにしてフランスに逃れた。その後ジェームズ二世はフランスのサン＝ジェルマン＝アン＝レー城に住むことを許された。1696年（ジェームズ63歳）には王位奪還を狙ってウィリアム三世暗殺計画を立てたが失敗に終わり、ルイ十四世との関係も冷えていった。ジェームズ二世はその後、1701年脳出血で死亡した（67歳）。遺体はサン＝ジェルマン＝アン＝レーに埋葬されている。『ウィキペディア』。

- 4 ウィリアム三世 (William III, 在位 1688-1702)。
- 5 ジェームズ二世のこと。
- 6 Thebes：テーベ、古代ギリシアのポイオティアの都市、アテネと敵対した。アレキサンダー大王（在位：紀元前 336- 紀元前 323 年）によって紀元前 335 年に滅ぼされた。
- 7 Cyrus：キュロス。大キュロス（紀元前 600 年頃 - 紀元前 529 年）は、イランの建国者で、古代イラン帝国（ペルシア帝国、アケメネス朝）の初代皇帝（紀元前 550 年 - 紀元前 529 年）。古代エジプトを除くすべての古代オリエント諸国を統一して、空前の大帝国を建設した。古代ペルシア語名をクリシュなどといい、ギリシア語名をキュロス（クロス）という。同名の王子小キュロスと区別して「大キュロス」、キュロス大王ともいい、同名のアンシャン王と区別してキュロス二世とも呼ばれる。キュロスは、メディア王国（マード）に従属する小王国アンシャンの第7代の王（紀元前 559 年 - 紀元前 550 年）であったが、紀元前 550 年にアステュアゲス王を打倒してメディアを滅ぼし、不死身の 1 万人と呼ばれた軍団を率いてリディア王国や東方など各地を転戦して征服。ついには新バビロニア王国を倒し、バビロンに入城して「諸王の王」と号し、バビロン捕囚にあったユダヤ人を解放した。『ウィキペディア』。
- 8 Timariots：ティマリオット。オットーマンサルタンに仕えた非常備騎士団。戦時には自己負担で武装し、兵士を伴ってサルタンのもとに馳せ参じる義務が課せられていた。食料はサルタンによって供給された。サルタンは戦時にはこのような方法で急速に軍隊を召集でき、戦争終結時には解散させ、それぞれの封土に帰郷させたので、彼らの戦力を必要としない平時には維持費用は不要であった。『ウィキペディア』。
- 9 Janisaries：イエニチェリー。オスマン帝国における常備歩兵とその軍団。トルコ語で〈新しい兵士〉を意味する。軍団の創設に関して定説はないが、十四世紀後半のことと推定されている。1354 年以後オスマン朝のバルカン領土が拡大すると、新たな戦力の補給とバルカン諸民族の同化政策とを兼ねてこの軍団が創設された。最初、戦争捕虜の 1/5 が戦利品として国庫に属したことから、これをトルコ人の家庭に預けてトルコ語とムスリムとしての生活習慣とを身につけさせた後、軍団員として登録した。この軍団は十六世紀末までは、オスマン帝国軍の精鋭として規律正しく、王朝の発展に貢献した。十七世紀以後は軍紀が乱れ無頼集団化して、しばしば暴動を起こした。十八世紀末以後、帝国軍隊の西欧化改革が進むと、軍団はこれに反対し、反乱を起こしたが、マフムト二世は 1826 年に軍団を廃止

した。平凡社『世界大百科事典』。

- 10 Spahi's : スイパーヒー (sipahi) とは元々ペルシア語の「兵士、軍人」を意味する sipahi からの借用語であるが、狭義にはオスマン帝国で組織され、中世ヨーロッパにおける封建制度の中での騎士に相当する集団を指す。召集されるにあたり給料として一定の封土での徴税権を帝国から与えられるティマール制がとられていた。オスマン帝国の常備軍騎兵ではあるが、時代が進み銃と大砲が主要な兵器として定着するまで、実際にオスマン帝国の戦力はこうした騎兵達が多くを占めていた。装備は所有する封土によってまちまちであったが基本的には軽装で戦法も射騎戦法が主であった。十五世紀頃になると重装騎兵へと変わっていったが、さらに時代が進み十七世紀頃には銃の発達から重装化よりも軽装化による機敏性を重視されたためか、全体としては軽装騎兵へと戻っていった。中世から近代に移行する中で西洋の騎士やそれを支えた封建制度が没落していったのと同様に、オスマン帝国が拡大していく中で、スイパーヒーやその他のオスマン帝国の騎兵部隊は、小銃と重装備の騎兵とを揃えたオーストリア帝国をはじめとするヨーロッパ諸国の勢力を打ち破ることは困難になった。特にウィーン包囲戦での敗北から徐々にその重要性が失われていった。それとは対照的に火砲で武装したイエニチェリ及びその他の軍隊の重要性が高まり、要員と軍事費が大幅に増加していったため、スイパーヒーとそれを支えていたティマール制の存在価値は共になくなり、最終的には形骸化し没落していった。『ウィキペディア』。
- 11 Palma : パルマ公。アレッサンドロ・ファルネーゼ (Alessandro Farnese, 1545年8月27日 -1592年12月3日) は、第3代パルマ公およびピアチェンツァ公。第2代パルマ公オッターヴィオと公妃マルゲリータの子。名は、曾祖父であるローマ教皇パウルス三世の本名に由来する。母がスペイン・ハプスブルク家の出身であることから、スペイン勢力に就いて軍事的才能を発揮した。また、妻がポルトガルのマヌエル一世の孫娘 MARIA であったため、マドリードの宮廷でも重きをなした。1571年のレパントの海戦に参加した。1578年からスペイン王フェリペ二世よりネーデルラント総督を命じられ、南部10州をスペインに帰順させる功をたてた。1589年にフランスでヴァロワ朝断絶後、カトリック同盟の貴族たちがブルボン家のアンリ四世の王位継承を認めず内乱になると、アレッサンドロはスペイン軍を率いてカトリック同盟の救援に向かった。1592年、ルーアンにおいてアンリ四世の軍勢と交戦中に重傷を負い、アラスで死去した。『ウィキペディア』。
- 12 Flanders : フランダース、当時はスペイン領であった。1556年のカール五世の退位の後、ハプスブルク家の領土は息子フェリペ二世と弟フェルディナント一世に分けられた。そしてネーデルラントはスペイン王位とともに息子フェリペに相続された。フェリペ二世とネーデルラント人との争いは1568年に始まる八十年戦争となった。北部7州 (フローニンゲン、フリースランド、オーファーアイセル、ゲルデルン (上部4分の1以外)、ユトレヒト、ホラント、ゼーラント) はネーデルラント連邦共和国として独立を得た。南部のフランドル、

ブラバント、ナミュール、エノー、ルクセンブルクなどの州は、パルマ公アレクサンドロ・ファルネーゼの軍事・政治的な力によりスペインの支配下に戻された。特に有名なのが、アントウェルペン包囲（1584年-85年）である。そのため、これらの州は「スペイン領ネーデルラント」もしくは「南ネーデルラント」として知られていた。北部の連合州は八十年戦争の間、ランブール、ブラバント、フランドルの各地域を保持し続けた。この戦争は1648年のヴェストファーレン条約で終結した。アルトワとフランドルの一部とエノーは、十七世紀から十八世紀の間にフランスに譲渡された。『ウィキペディア』。

- 13 de Vere : ドミア Edward de Vere, Earl of Oxford (1550-1604) エリザベス一世時代の廷臣・詩人。第17代オックスフォード伯。彼は1550年4月12日に誕生したが12歳の時(1562年8月3日)に父が死亡したため、21歳の成年に達するまで王室被後見人となった。青年期に一時期、カトリック教徒との交友のためロンドン塔に幽閉されたが、短期間で解放された。彼の広範囲にわたる文芸への後援と、領地経営の怠慢により、相続した領地すべてを売却せざるを得なかったことにより、宮廷での出世は望めないと思えたが、1585年オランダで、1588年スペイン無敵艦隊との戦いで、短期間、軍司令官を務めた。1586年にエリザベス女王は彼の困窮を救うため、1000ポンドの年金を与えた。1603年7月25日に行われたジェームズ一世の戴冠式では式部長官を勤めた。1604年6月24日死亡。(16th Century Renaissance English Literature (1485-1603) <http://www.luminarium.org/renlit/index.html>, Edward de Vere by Gary Goldstein および DNB による。)
- 14 当時、一部の軍人は国会に議席を持っていた。
- 15 Praetorian Guard 《古代ローマ皇帝の》親衛隊、《のちに強大化して皇帝の任命・暗殺にも関与した》。紀元前二世紀までは、ローマの将軍のためのボディガードであったが、初代ローマ皇帝アウグストゥス (Gaius Iulius Caesar Octavianus Augustus : 在位 紀元前27年-紀元14年) が紀元前27年にローマ市内および周辺に配置するそれぞれ500人からなる9グループの親衛隊を編成した。隊員は16年間の勤務期間、特権と特別の給与を得た。彼らはしだいに皇帝の即位、廃位に政治的影響力を及ぼすようになり、紀元193年、皇帝ペルティナクス (Publius Helvius Pertinax : 在位 193年1月1日-193年3月28日) を暗殺後、彼らは皇帝位をディディウス・ユリアヌス (Marucus Didius Severus Julianus: 在位 193年3月28日-193年6月1日) に競売で売り渡した。同年、彼の後継者、皇帝ルキウス・セウェルス (Lucius Septimius Severus : 在位 193年-211年) により編成替えされ、紀元312年に皇帝コンスタンティヌス大帝 (Gaius Flavius Valerius Constantinus: 在位 306年-337年) により廃止された。トレンチャードとモイルはそのパンフレットで、ローマ帝国「二十六人の皇帝のうち十六人は自らの軍隊によって退位させられ、もしくは殺害されたことがわかるであろう」と述べ、軍隊を常駐させることが政治的に悪影響を及ぼし、国民にとって害悪となる例として提示している。(拙論、『語学教育部ジャーナル第2号』「17世紀イングランド常備軍」2006年3月、170ページ参照)。